



留萌市史……………②①

浅草観音に祈願

した億太郎翁

町債の使途は大留萌建設費のうち、**①副港増築**、**②河川切替**とその埋立、**③市街地計画**を主体とする大留萌建設の土木工事に絞られる。

この町債は大正十年六月の借入金（大正十年百万円、十一年百万円、十二年四十九万四千円）の総額二百四十九万円におよぶもので償還期限を大正十四年六月と決めた年利息一割で、帝国生命保険会社外十三社より借り入れた。

理事者をはじめとする町民の苦悩も無かったとおもわれる。事實は簡単に運ばず、ついに償還不能におちいり、理事者の交替も多く、町民は塗炭の苦しみをなめることになった。

中でも建設功労者五十嵐億太郎は昭和四年の冬、浅草観音に命をかけて祈願をも行なうという深刻な苦闘のしるしを残した。つぎに町有志、林太右衛門（大正十三、十四年ごろ）、十代町長檉田三郎（昭和五、六年ごろ）および十一代町長、赤石忠助（昭和九、十年ごろ）、法学博士 蛭川新（留萌町の模範的町債）らの手記をもとに、その経過をたどりたい。

町債のおこり その②

■町債事業

※文芸書・道化の精神（太帝治）
・浮舟寺（田辺聖子）
・戦艦武蔵（吉村昭）
・唐三彩の謎（石沢英太郎）
・筑紫夫人（小野昭三）
知らざる詩人―大手拓次の生涯―
（生方たつる）
・華岡青洲の妻（有吉佐和子）
・不信のとき（有吉佐和子）
・生き物の集る家（津島佑子）
・南京大虐殺のまぼろし（鈴木明）
・壺（たがね）師（平岩弓枝）
・望郷（原田康子）
・おかしな先祖（星新一）
・ムツゴロウ

の獣医修業（畑正憲）
・天然記念物の動物たち（畑正憲）
・大本營が震えた日（吉村昭）
・或る一人の女の話（宇野千代）
・他国の死（井上光晴）
・美幸は星になった（久留生強）
・生きている兵隊（石川達三）
・続徳川の夫人たち（吉屋信子）
・わたしの文章修業（俵萌子）
・葬女（津村節子）
・愛について（大岡昇平）
・鷗外―闘う家長―（山崎正和）
・焦点（アーサー・ミラー）
・調書（ル・ク

レジオ）
・われらが不満の冬（スライムベック）
・スペイン岬の謎（エラリー・クイーン）
・一九四八年八月（ソルジェニツィン）
・アラバマ物語（ハーバー・リー）
・おだやかな死（ポーヴォワール）
※実務教養書・血液型人間学（能見正比古）
・世界の蝶類（ロバート・グッドン）
・新数学入門（矢野健太郎）
・沈黙の世界（ビカート）
・フランス語作文の基礎（中原俊夫）
・結婚が変わる―自立す

る性と生（吉武輝子）
・人間に未来はあるか（G・R・テイラー）
・三分間スピーチ（諸星竜）
・企画力（多湖輝）
・子どもの整形外科（村上寛久）
・時間外労働と労働者の権利（青木宗也）
・就業規則入門（窪田隼人）
・おもちゃ（福田繁雄）
・たのしい造形まんが（根本進）
・水河期へ向う地球（根本順吉）
・この人を見よ―ブツダ・ゴータマの生涯（増谷文雄）
・医用生体工学―新しい医学の世界―（H・S・ウォルフ）

屈曲延々と続く留萌川を改修して、新市街地を区画設定しようとする町民の宿望が五代町長福岡幸吉を動かし、その筋へ許可の申請をしたのが留萌川改修に手をそめた最初で、大正七年のことである。しかし、道庁がとくに調査することや許可をするようなことは全然なかった。

このため、留萌港は失敗どきか無用だとか、工事を中止すべきだなどの風説さえ耳にするようになった。

当時の港の修築は遅々として進まず河川切替をせずに河口の浚渫をする計画であったので、内港は留萌川より吐き出す土砂と、外港の漂砂のため閉塞され、定期寄港船が入っても荷物の積おろしができず、わずかに通船で連絡するようになった。

野本治平を第六代町長として迎えることになり、野本町長は大正八年三月二十四日、正式に就任した。

炭も毎年数万トンの出炭があったが、これも港不備のため、積出されなかった。このため町がうける打撃は甚大で、何とか応急の策が立てられな

一般町民は失望落胆し、意気喪失して対策を講ずる気力さえなくなり、中には他に転住する者も続出し、建物までも他に移すという



五十嵐 億太郎